

# 搾乳ロボットを 上手に使うために



搾乳ロボットは人と牛に優しいシステムです。人に対しては労働力負担の軽減、牛に対しては人の都合ではなく、牛の都合が優先されます。

搾乳作業から解放された時間を有効に利用することで、搾乳ロボットから得られる情報を活用し、牛が気持ちよく生産できる環境づくりを目指しましょう。

## 搾乳ロボットの コンセプトを 理解しよう

国内の搾乳ロボットは、(株) コーンズ・エージー、デラバル (株)、GEA オリオンファームテクノロジーズ (株)、(株) 本多製作所等で取り扱いがあります。導入に当たってはディーラーと良く相談し、それぞれの特色をしっかりと理解し、牛に無理をかけずに生産性の向上と効率経営を目指しましょう。



## 搾乳ロボット 導入時

導入時は牛が馴れるように、搾乳回数、配合飼料量の調整、牛追いなどにより頻りに搾乳ロボットに誘導することが必要です。ディーラーとよく連携して牛が搾乳ロボットに早く馴れるように努めましょう。

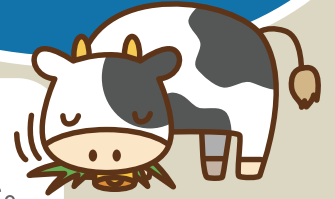


## 馴致後の 正しい設定と 飼料設計

牛が搾乳ロボットに馴れた頃に、再度、搾乳回数などの設定を見直しましょう。

また、飼料設計した PMR（基礎混合飼料）の濃度や、給与した量を牛が十分に摂取しているかを確認しましょう。

- ① 粗飼料の質が低下し量が不足していないか。
- ② 植物性油脂（不飽和脂肪酸）の比率が高まっていないか。
- ③ 暑熱時、粗飼料の採食量が減っていないか。
- ④ 牛が密飼い状態で飼槽スペースが不足していないか。



このようなことが起これば、残飼料の増加、早食い、固め食い、選び食いが行われ、ルーメン発酵を乱します。良質な粗飼料の給与、タイミングの良いはき寄せ、ミネラル、ビタミンEなどを通常より増やしましょう。また、水槽の個数と位置だけでなく水槽をきれいに保ち、飲水量を高めるように心がけましょう。

## モニタリングの 徹底

ロボット管理データ（搾乳回数、乳量）、検定情報（牛群構成・泌乳期、乳量・乳成分率のバランス）、バルク乳情報（乳成分、FFA）などの活用と、実際に牛の状態を観察することで、質の高い飼養管理を目指し、健康な牛から良質乳を生産しましょう。

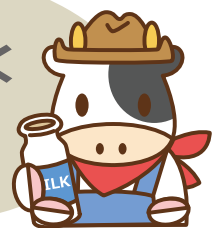


## 生乳をやさしく

生乳中の脂肪分は被膜（脂肪球膜）で覆われ、守られた構造になっています。**生乳の扱いを乱暴にするとその被膜が破れ、その中の脂肪分が露出し、その結果、牛乳の風味、おいしさが損なわれる**ことがあります。

**最終生産物である生乳は繊細です。**

生乳はやさしく  
扱きましょう



公益社団法人

北海道酪農検定検査協会

Hokkaido Dairy Milk Recording & Testing Association